

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 14 日現在

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26884061

研究課題名(和文) ロシア・アヴァンギャルド芸術における音声の複製技術の影響

研究課題名(英文) The Influence(s) of Sound-Reproduction Technologies on Russian Avant-garde

研究代表者

八木 君人 (Yagi, Naoto)

早稲田大学・文学学院・講師

研究者番号：50453999

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本課題では、フォノグラフやグラムフォン、ラジオといった音響複製技術とその応用技術が普及し変貌していった、1910-30年代のロシアにおける音響環境を背景に、ロシア・アヴァンギャルド芸術やロシア・フォルマリズムの文学理論に与えた音声の複製技術の影響を検証した。具体的な成果としては、詩人イリヤ・ズダネヴィチの創作活動の展開におけるフォノグラフの意義を明らかにし、また、ロシア・フォルマリズムの理論、とりわけボリス・エイヘンバウムの文芸理論にフォノグラフが影響を与えた可能性についてさらに考察した。

研究成果の概要(英文)：The emergence of modern sound-reproduction technologies (such as the telephone, the phonograph, the gramophone, and the radio) at the end of the 19th century brought about a profound change in the sound environment. With these technologies, sound, and specifically the sound of the human voice, was released from the restriction of its "here-now" character, i.e., originality, for the first time in human history. There is no doubt that this change transformed our images of hearing and sound, and offered artists in various fields the possibility of creating new art forms. As concrete results of this research, I revealed some traces of the images of hearing and sound, as transformed by modern sound-reproduction technologies, in the development process of Il'ja Zdanevich's poetics and in the theory of Russian Formalism, particularly in Boris Eikhenbaum's theoretical works from 1918 to 1924.

研究分野：人文学

キーワード：ロシア・アヴァンギャルド ロシア・フォルマリズム ボリス・エイヘンバウム イリヤ・ズダネヴィチ セルゲイ・ベルンシテイン 複製技術 フォノグラフ 音響メディア

1. 研究開始当初の背景

本研究代表者は、現代文芸学の端緒といわれるロシア・フォルマリズムという理論的な運動の生成・発展を歴史化する研究に取り組んできた。本国ロシアにおけるロシア・フォルマリズム研究でも、2001年辺りから、一部でこうした傾向をもつ「再考」がみられるようになってきたが、研究代表者がロシア・フォルマリズムの成立条件の中の重要な一つ契機として考える、映画やフォノグラフといった複製技術の普及のおよぼした根本的なレベルでの影響について主題的に取り扱うものはほとんどなかった。

いうまでもなく、20世紀的な複製技術の普及やマスメディアの変化に伴い、人々の感性は大きな変容を蒙ったはずである。ロシア・フォルマリズムがもたらした文学作品観の転換を、そのあらわれの一つとして捉えることもできるだろう。しかし、そうしたレベルでの複製技術の「影響」を検証するためには、ロシア・フォルマリズムのみならず、より広いパースペクティブで捉え、感性的な変化が顕著にあらわれてくる当時の芸術作品全般を射程に入れて検討する必要があるだろう。

2. 研究の目的

音声の複製技術が実用化された19世紀末から20世紀初頭のロシアにおいて、この技術的革新がもたらした社会およびロシア・アヴァンギャルドの諸芸術(とりわけ詩のジャンル)への影響を明らかにすることが本研究の目的である。ロシアに限らず、「音」の複製技術の多方面にわたる影響の研究は、ある程度の蓄積はあるものの、ほぼ同時期に普及した複製技術である「映画」に関する影響に比べ、具体的な研究が十分になされているとは言い難い。しかし、「音声」の複製が可能になったことは、「音」や「声」に対する人々の想像力の在り方を大きく変えたのは言うまでもなく、しかも、「声」はとりわけヨーロッパ文化においてきわめて「生」に密着したものであるため、音声の複製可能性が人々の生に対して、何らかのかたちで決定的な影響を及ぼしたことは間違いない。

当時の諸芸術と併走してあったロシア・フォルマリズムの理論的展開の中でも、セルゲイ・ベルンシテインは、詩人による自作の詩の朗読をフォノグラフで録音し、それを用いて詩の分析を行っていた。彼がそうした研究を行った「芸術的発話研究室」は、1918年に設立された「生きた言葉研究所」の中に設けられた一部会であるが、「生きた言葉研究所」がルナチャルスキーの肝いりで設立されたことが端的に示すように、「生きた言葉」や「発話」という問題は、この時期に社会的にもアクチュアルなテーマであった。

一方で、そうした研究機関のみならず、とりわけ詩の分野において、数々の実験が行われたこの時期に、音/声を扱う詩人たちが、当時の音声の複製技術について無関心であ

ったとは考えにくい。しかしながら、そうした観点からの研究はまだ著されていない。

従って、本研究では、この時期のロシアにおける詩や文芸学、演劇や音楽など、ロシア・アヴァンギャルドの諸芸術における音声の複製技術からの影響や具体的な用いられ方などを検証し、そのことがもたらした「音」や「声」の新たな意義について、歴史的に明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

上述の目的を達成するために、以下のような区分を設けて目的を設定した上で、資料の収集・読解・考察を進めていった。

- (1) 19世紀末から1930年代までのロシアにおけるフォノグラフやグラモフォンの受容状況を具体的に明らかにし、ラジオや電子音楽の展開を含め、当時の音響環境の見取り図を描くこと：
最初期(19世紀末)のフォノグラフやグラモフォンのロシアでの受容状況
大衆文化を中心とした帝政ロシア時代のフォノグラフやグラモフォンの受容状況
革命後から1930年代の大衆文化および学術機関でのフォノグラフやグラモフォンの使用状況、ラジオや電子音楽等を含めた音響環境の調査
- (2) ロシア・アヴァンギャルド諸芸術の中でも、とりわけ未来派や象徴派の詩やパフォーマンスにおける、詩と音楽との相互関係にも注意を払いながら、音声の複製技術の影響を明らかにすること。また、立体未来派はオペラ『太陽の征服』等を上演していることから、当時の演劇文化における音響技術の使用状況等についても明らかにすること：
プリューソフ、ペールイらの詩や詩論における「音」と「音楽」の意義の検証
マヤコフスキー、クルチョヌィフ、グネドフらの詩や詩論、パフォーマンスにおける「音」と「身体」の意義の検証
マチューシンの「音楽」と「絵画」、立体未来派におけるマチューシンの意義の検証
立体未来派のオペラ・演劇と当時の演劇文化全般における音響技術の使用状況の調査・検証

(1)の に関しては、主に、早稲田大学図書館が所蔵するマイクロフィルムのシリーズ“Russian Theater in the early 20 century”や“Early Russian Cinema”に含まれるフォノグラフやグラモフォンに関する記事を調査・検証し、また、ロシア国立図書館において、1912年から1914年にかけて計16号刊行されていた雑誌『声とことば』を調査・検証した。この雑誌には、俳優、演劇学者、音楽学者、医者、言語学者、文学者

等々が「声」や「発話」を巡る記事を寄せているが、寄稿者の中には、のちに「生きた言葉研究所」を創設するフセヴォロド・フセヴォロツキイ＝ゲルングロツスも含まれており、革命以前より続く、こうした問題に対する関心の連続性を看とることができた。(1)に関しては、これまでの研究過程ですでに取得済みの資料の読解が中心となったが、研究期間中、新たに、1923年に刊行されたイーゴリ・グレボフ編纂による論文集『DE MUSICA』を調査・検証することができた。この雑誌に収められた諸論文は、「音楽」の価値を、ロマン主義的な観点からではなく、当時の最新の認識論や物理学に基づいて意義づけようとする傾向をもち、当時のレフ・テルミンの電子音楽の研究やアルサーニー・アヴラアモフの「音楽」への実験的・実践的なアプローチと共通の基盤を有しているものといえる。

(2)に関しては、全般的に、すでに取得済みの資料の読解・検証が中心となったが、研究期間中に、(2)に関連する(のみならず本研究全体にかかわる)重要な研究書がいくつか出版された。そのうち、とりわけ重要と考えられるのは、オクサナ・ブルガコワ『文化現象としての声』と、論文集『生きた言葉：ロゴス・声・運動・ジェスチャー』である。後者を編纂したヴラジミル・フェシチェンコ氏や、寄稿者の一人であるヴァレリー・ゾロトゥヒン氏とは、本研究について直接、意見交換を行った。また、ゾロトゥヒン氏からは、セルゲイ・ベルンシテインに関する貴重な情報を得ることができた。さらに、これに関連して、フォルマリズム関係の資料として、エイヘンバウムの「芸術の言葉について」(1918)の手稿、『ロシア抒情詩の旋律学』(1922)のもととなった口頭報告の手稿の調査を行った。

4. 研究成果

本研究の目的である(1)に関しては、未だ取得した一次資料の読解が十分に完了しておらず、また、上に述べたように新しい研究書も出てきていることから、ここまでの成果を公表することはまだできていないが、鋭意、研究を続け、19世紀末から1930年代にかけてのロシアにおける音響環境の見取り図について論考を著したいと考えている。

(2)に関しては、たとえば、実現はしなかったものの、「1915年にはフレブニコフ、マヤコフスキー、アセエフなどの自作の朗読の入った音声本＝レコード・アルバムが出るという広告があらわれた」という、研究者 JI. シーロフの指摘からも、当時の詩人たちの中には、その創作においてフォノグラフの利用を視野に入れていた者がいたことは明らかであるものの、詩人たちが直接的に音声の複製技術に言及していることはきわめて少ないということが、残念ながら、明らかになってきた。このことは決して、「影

響」を否定するものとはいえないが、実証するのが困難だということである。

「5. 主な発表論文等」で挙げた報告“The Influence of Sound-Reproduction Technologies on the Theory of Russian Formalism: The Case of Boris Eikhenbaum”は、既出の日本語論文で明らかにしたコンセプトを軸に、本研究で取り組んできた当時の音声の複製技術の使用状況や、実際にフォノグラフを使用して詩の分析を行っていたベルンシテインの研究とエイヘンバウムのそれとの関連を加えて発展させ、エイヘンバウムの着想への音声の複製技術の「影響」を浮き彫りにしたものであった。エイヘンバウムとベルンシテインとの間に直接的な交流があったことはいうまでもないが、詩へのアプローチについて両者に共通しているのは、聴覚文献学の代表とされるジーファースらの量的実験に対する批判的態度である。エイヘンバウム『ロシア抒情詩の旋律学』(1922)よれば、彼にとっては、「精神科学」的なアプローチをとるべき詩の分析に対して、量的実験に基づき、読み手の主観に彩られた朗読と作者の意図を志向する朗読とに分けるジーファースの方法が、あまりに「自然科学」的なアプローチであるように映る。(エイヘンバウムはそういう言葉では述べていないが)量的実験によって導き出される平均的な朗読のイメージは、詩を分析するには適当でないということだ。

ベルンシテインも同様の観点でジーファースの方法を批判し、ロシアの当時の詩人たちの朗読が、むしろ朗読者の個性によって彩られていることを指摘する。自作の詩の朗読をする詩人たちの声をベルンシテインがフォノグラフで録音し、それをデータとして詩を分析する目的の一つは、そうした量的実験が捨象する詩人の朗読の個性を明らかにすることで、書字に依拠して創作する詩人と、実際の発声に依拠して創作する詩人とをタイプ分けできるということを示すことにある。従って、彼は、「詩の旋律学とは、詩の理論の問題ではなく、朗読の理論の問題なのである」とまで述べる。このことは、少なくともベルンシテインが、詩の分析のための一次資料を文字テキストではなく、録音された朗読とすべきだと考えているということもできるだろう。

一方、エイヘンバウムは、彼が唯一、同時代の詩人を単著のかたちで論じた『アンナ・アフマートワ：分析の試み』(1923)でも、あくまでテキストに内在するかたちで詩の分析を行うのであるが、しかし、(音響として聴くことではなく)実際に朗読＝発声することによって生まれる契機(たとえば、朗読する際の唇の動き等)に注目しながら、アフマートワの詩のもつ特徴を呈示している。ここには、同時代の詩人として、実際にアフマートワの朗読を目にし、耳にした経験が反映していると考えられる。

確かに、詩の分析において、そうした発声

やそれに伴う調音器官の動きを重視する姿勢は、ヴィクトル・シクロフスキーのザウミ論に代表されるように、いわゆるフォルマリストたちには馴染みのある発想である。しかし、エイヘンバウムのアフマトワ論を考える上で重要だと思われるのは、ジーファースの方法論に対して同様の批判的態度を示したベルンシテインとの差異である。上に述べた通り、ジーファースに対するの批判を踏まえて、ベルンシテインは、録音された「声」を一次資料として詩の分析を行うのであるが、エイヘンバウムは、あくまでそれとは別の、録音には還元されない「声」を扱おうとしているといえる。無論、アフマトワ論では、その「声」を保証するのは、繰り返しになるが、おそらく、実際に彼女の朗読を耳にし、目にしたという経験であり、彼が詩を論じたものの中では特殊なケースであるといえるが、しかし、あくまでテキスト内在的な分析を通して見出される「声」であり、その点でベルンシテインとは袂を分かつといえよう。

また、エイヘンバウムは、ベルンシテインが提起したような朗読の問題についての論考も著しているが、たとえば、1923年頃に執筆されたとされる「室内朗読について」(1927)の中で設けられるのは、詩人による朗読と役者による朗読との区別である。それに加え、この論考の中で彼は、詩人による自作の朗読は、「原理」を明らかにする上で重要ではあるものの、それを絶対視しないように注意を促している。このことは、一方で、従来のテキストという物言わぬ文字があり、他方で、詩人による自作の朗読の録音という新たな資料体があらわれてきた状況下で、テキストに内在する「声」を、録音された「声」との差異において、抽出しようとする試みだと考えられるのではないか。

この報告のテーゼは、エイヘンバウムの理論的展開を、「音」と「声」の差異という観点から新たなパースペクティブを与えたという点で一定の評価は受けたものの、「影響」に関しては、エイヘンバウムの著作の中に音声の複製技術に対する直接的な言及がみられないこと、また、エイヘンバウムによるベルンシテインの研究に対する言及もないことなどから、聴衆の反応に鑑みれば、「仮説」の域を出ないものに映ったというのが率直な印象である。

「実証」の難しさの中で研究を進めていく過程で、フォノグラフに関して直接的に言及している数少ない詩人・作家として、イリヤ・ズダネヴィチの調査を行った。イリヤ・ズダネヴィチは、1922年2月に移住先のパリで行った講演において、自らのそれまでの活動を概観しながら、「われわれの新たな目的にとってフォノグラフは、唯一、適当な、それ故に不可避の装置であった」と述べており、その創作においてフォノグラフの利用を視野に入れていたことは明らか

である。では、イリヤ・ズダネヴィチがどのような点でフォノグラフを、詩を記録するための書字にかわる新たなメディウムと考えていたか？ 詳細は、「5. 主な発表論文等」で挙げた拙論「イリヤ・ズダネヴィチ「フシオチェストヴォ」に寄せて：美術史から詩へ、詩からフォノグラフへ」を参照してほしいが、彼がフォノグラフに担わせた意義とは、「声」の同時性と複数性とを実現することであった。これは、ロシア・アヴァンギャルドの詩の運動の中で、詩人たちが音声の複製技術であるフォノグラフに対してどのように反応したかを示す一つのケース・スタディとなったといえる。また、この成果から翻って、イリヤ・ズダネヴィチの創作の特徴をなす、彼の実験的なタイポグラフィの持つ意義についても、新たに再考することが可能になるだろう。

一方、この拙論は、イリヤ・ズダネヴィチを単独で扱った日本語論文としては初のものであり、ロシア・アヴァンギャルドの中で特異な位置を占め、1921年以降はフランスで多面にわたり活躍していた彼の、ロシア時代の初期の活動を紹介するという点でも十分に意義のあるものであると自負している。それに加え、もともとはラリオノフや、とりわけゴンチャロワの絵画スタイルを支えるものとして彼によって生み出された「フシオチェストヴォ」という理念が、いかに彼の詩の創作の理念である「多元詩」というコンセプトに流れ込んでいくかを詳らかにした点でも、有益なものであるといえよう。

もう一点、本研究に関連する成果として、先に記したエイヘンバウムの報告を行った国際学会“ICCEES IX World Congress 2015 in Makuhari”にて、その個人発表とは別に、パネル“The Influence(S) of Sound-Reproduction Technologies on Russian Art and Science between about 1910 and 1940”を組織したことを挙げておきたい(Aug. 4, 2015, Kanda University of International Studies (Chiba, Japan))。このパネルは、伊藤倫氏(“Sounds of Russian Theatre in 1920-30s”)、ヴァレリー・ゾロトゥヒン氏(“Sound Recording Technology in the Avant-Garde Poetry and Russian Formalism”)、リュボフィ・プチョルキナ氏(“Solomon Nikritin and a New Sound Culture of the Post-Revolutionary Russian”)の報告となり、本研究代表者は対論者として加わった(司会は神岡理恵子氏)。パネル参加者同士で、それぞれの報告に関して有意義な意見交換ができたことはいままでのないが、これら報告によって、伊藤氏からは、「3. 研究の方法」で記した(2)-に関して、プチョルキナ氏からは(1)-に関して、ゾロトゥヒン氏からは、(1)- や(2)- に関して多くの示唆を得た。また、聴衆の反応も良く、活発な質疑応答が行われ、われわれの問題意識を広く共有する機会を提供できた。

一方、上で記したパネル外で行われた本研

究者による個人報告の内容に関しても、これらパネル参加者からさまざまな示唆に富む意見を得ることができた。とりわけ、ゾロトゥヒン氏からは、先述したベルンシテインの情報の他にも、当時、調査を進めていたイリヤ・ズダネヴィチについても意見交換をすることができ、拙論の発表へと繋がった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

八木君人、イリヤ・ズダネヴィチ「フシオチェストヴォ」に寄せて：美術史から詩へ、詩からフォノグラフへ、ロシア文化研究、早稲田大学ロシア文学会、23号、2016年3月、39-56頁、査読無。

〔学会発表〕(計1件)

Naoto Yagi, The Influence of Sound-Reproduction Technologies on the Theory of Russian Formalism: The Case of Boris Eikhenbaum, ICCEES IX World Congress 2015 in Makuhari, Aug. 6, 2015, Kanda University of International Studies (Chiba, Japan). (なお、報告はロシア語で行った。)

〔図書〕(計0件)

〔その他〕

ホームページ等：特になし

6. 研究組織

(1)研究代表者

八木君人 (YAGI, Naoto)

早稲田大学・文学大学院・講師

研究者番号：50453999